

日本一のサラブレッドのふるさと 新ひだか町

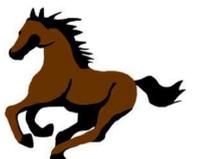


しんひだかちょう
新ひだか町

競走馬の生産頭数全国一

全国の競走馬の約4分の1が生産される日本一のサラブレッドのふるさと「新ひだか町」。

日高山脈と太平洋に囲まれ、夏は涼しく、冬は雪が少ない「涼夏少雪の郷」として注目されている新ひだか町は、馬を活かしたまちづくり、「馬力本願プロジェクト」に取り組んでいます。



馬力本願プロジェクト

国の地方創生推進交付金を活用し、平成28年に本格的にスタートしたこのプロジェクトは、「子供たちへの馬文化の伝承」、「おもてなし環境・基盤の整備」、「移住・定住の促進」という3つの大きなテーマのもと取り組んでいます。

なかでも、ふるさとを知り、ふるさとを愛する人をつくるための「馬文化の伝承事業」は、地域おこし協力隊が中心になって、これまでになかった新たな事業を積極的に展開しています。

馬は人を惹きつける

雄大な日高山脈を背に、緑鮮やかな放牧地でのんびりと草をはむ馬の親子。ゆつくりとした時間が牧歌的で情緒豊かな風景の中を流れてゆきます。



馬が醸し出す空気に惹かれて、昔から多くの人々が訪れてきたこの町の魅力をさらに磨き上げようという取組が「馬力本願プロジェクト」です。

～馬力本願プロジェクト～



▲ 牧場見学の様子

「なのみちカフェ」から ヒントを探る～



前号までの「地域を創る人」に代わり、新たに地域で活躍している方々を紹介します



しゃこたん しゅうこみちきょうぎかい
(一社) 積丹やん集小道協議会

かわざしごろう
河岸悟郎さん

とらいかずこ
戸来和子さん

べっしょのりかず
別所範一代表理事



～なのみちカフェ～

鈴木知事が地域訪問する機会に、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した若手職員が皆様にその様子をお伝えます。

令和元年7月16日訪問

にしんでん しゅうかん

鍊伝習館 ヤマシメ番屋編

初めての「なのみちカフェ」は、「積丹は鍊の街でもあることが知シヤコタンブルーとも呼ばれる美しい海で有名な積丹町を訪問。町内に現存する歴史的建築物を活用し、文化の保存と伝承に関する取組を目的に町民有志で設立された「(一社)積丹やん集小道協議会」の皆さんにお話を伺いました。

今回知事が訪れたのは、「鍊伝習館 ヤマシメ番屋」と隣接する「石蔵」という施設。元々は鍊番屋で利用されていた建物を外部資金などを活用して改修し、平成28年に一般に開放されたそうです。

協議会の別所代表理事からは、「百年ほど前の建物で、初めてこの建物に入ったときは荷物が置いてある廃墟のような状況でしたが、このような歴史的な建物を我々の力で残したいという思いで町から無償で譲り受け、外部資金も活用しながら改修を続け、なんとか開放まで辿り着きました」、「地域おこし協力隊から町に定住された方に5月から9月までの間、カフェの運営をお任せしています。周知の効果もあって、最近はこちらを目的に訪れる人も増えてきました」と伺いました。

事は話します。

このヤマシメ番屋との出会いについては、ボランティア説明員の戸来和子さんから、「祖父が網元をしており、歴史を伝えるためにもこの建物を残したい」と参加したこと、同じく説明員の河岸悟郎さんから、「沢山あった番屋もこの一軒になり、文化施設を残したい」と考えて参加するようになったことを伺いました。

ここを活用して挑戦してみたいことをお尋ねすると、別所代表理事から、賛助会の会費だけでは維持管理費を賄うことができず、ヤマシメ番屋は体験できる宿泊施設にし、石蔵はグループで宿泊や貸し出しができないかなど、収益化に挑戦したいという今後の活動への思いをお聞きすることができました。



実際に使用されていた着物や提灯などが展示されていました。



1階のカフェで、協議会の皆さん、積丹町長、積丹町協議会議員の方々にお話を伺いました。

(※当日の知事の言葉から)

マチの魂、根っこにあるもの、そこを残そうとみんなで知恵を出して自分に何ができるかを考えるのが大事。

マチを元気にしようじゃないか、この建物を活用できないかという前向きな発想、やるんだという思いのある人が一人でもいなければ、ここでコーヒーを飲むこともなかった。皆さんの努力の結果、今があると思う。



『なおみち』 ～地域創生の～

かぶしきがいしゃ
株式会社 カンディハウス



ふじた てつや
藤田哲也社長

わたなべ なおゆき
渡辺直行会長



令和元年8月6日訪問

株式会社カンディハウス編

次に知事が訪れたのは、全国有数の家具産地でもある旭川市で、国内のみならず海外にも拠点を構えて高品質な家具を提供し、北海道遺産にも認定されている旭川家具のメーカー「株式会社カンディハウス」です。

今回知事が訪れたのは本社工場。昭和43年の創業から旭川の地に根ざし、出来る限り北海道産の木を使い、長く使えるよりよい生活の道具をつくることを心掛けています。

「いま一番力を入れているのは、北海道産の広葉樹を使った家具を作ること。平成26年から『この木の家具北海道プロジェクト』に取り組み、昨年は道産木材の使用比率が40%超になりました」と渡辺会長。北海道の強みは、森林資源を代表として自然に恵まれていること。この強みを産業や暮らしにどう役立てるかを考え、経済面で付加価値を付けようと、旭川市としてユネスコ創造都市ネットワークのデザイン部門の加盟を目指しているそうです。

藤田社長から、海外への事業展開にあたり、アジアは本社の国際

事業本部とディーラーで直接契約して完成品を現地販売し、輸出を伸ばしていること、36年前からアメリカに現地法人を設立、ヨーロッパはドイツを拠点に展開しているというお話がありました。

また、特に、急速な勢いで経済成長している中国やインドなどのアジア地域、成熟したマーケットであるアメリカにもっと事業展開していくべきとのこと。さらに「北海道の森林資源の55%は国有林と言われており、これを健全に育てながら使っていく必要がある」とや支える仕組みづくりが必要」という渡辺会長の思いもお伝えいただきました。



株式会社カンディハウスの皆様にお話をお伺いしました。



本社ではカンディハウスの歴史をお聞きました。



工場では実際に加工された木材を手に触れながら、家具になるまでの過程を説明していただきました。

(※当日の知事の言葉から)
ものづくりのマチとして、旭川が家具職人の歴史を作る中で、半世紀に渡って地域資源を活用してきた家具作りは、地産地消に大きく貢献された。
本道には豊富な森林資源があり、その価値は世界に誇れるもの。ものづくりの世界ブランドとして発信を続けられており、私も先頭に立つて情報発信する役割を果たしていきたい。

北海道創生ジャーナル「創る」が デジタルブックに！



エールを北のチカラに。

ほっかいどう応援団会議

ポータルサイトからアクセス！



最新号からバックナンバーまで、デジタルブック形式でご覧いただけます。
(PC・スマートフォン対応)



◆次号から本誌の発行を「ほっかいどう応援団会議」の取組と連携して行うため、紙媒体での発信から、タブレットやスマートフォンで閲覧が可能で読みやすい、デジタルブック形式での発信に移行します。

問合せ先：北海道総合政策部地域創生局地域戦略課
TEL：011-204-5089



ほっかいどう応援団会議ポータルサイトへ

ほっかいどう応援団会議

検索

URL： <https://hkd-ouendankaigi.jp>

北海道のホームページからもご覧いただけます（PDF形式）

URL： <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/csr/chicho/tsukuru/toppage.htm>

